



シリーズ第57話

子宮筋腫

産婦人科の病気と言えば、子宮筋腫がまず思い浮かぶほどポピュラーな病気です。30歳以上で閉経前の女性の場合、4人に1人ぐらいは筋腫があると言われています。実際、子宮がん検診などで婦人科を受診された方の中にも子宮筋腫は多く見つかりますが、治療を要する方はそのうちほんの一部です。貧血や生理痛の程度、筋腫の大きさやそれによる圧迫症状などにより手術をするかどうか相談します。

原因

子宮筋腫が発生する原因は分かっています。その発育に女性ホルモンであるエストロゲンが関係していることははっきりしています。そのために子宮筋腫は、性成熟期である30歳から40歳台にかけて多くみられ、閉経後には縮小します。

症状

子宮筋腫の症状は筋腫の大きさ、場所により異なりますが、とくに症状のない方が実際には多いようです。

典型的な子宮筋腫の症状は、過多月経とそれによる貧血です。顔色が悪く、階段の上り降りの際に動悸や息切れがあるという方です。もちろん筋腫が大きければ月経量も多くなり、貧血になる方も多い傾向にあります。しかし、月経量は筋腫の大きさ場所によっても異なり、大きくても貧血のない方や小さくても貧血になっている方がいます。特に粘膜下筋腫と言って、子宮の内側に発育した筋腫はピンプン玉程でも驚くほどの貧血になっていくことがあります。

治療

治療としては、対症療法、偽閉経療法、手術療法などがあります。

対症療法は生理痛に対し痛み止め、貧血に対し鉄剤などを処方して閉経を待つというものです。

偽閉経療法とは、薬によって一時的に（6カ月程度）閉経したのと同じ状態にして、その間に筋腫が縮小することを期待する治療です。女性ホルモンが少なくなれば筋腫も小さくなってくるわけです。偽閉経治療が終わると再び生理は回復してきますが、そうすると筋腫も再び増大して行くことが多いため、根本的な治療にはなりません。偽閉経療法は術前に貧血を治したり、あらかじめ筋腫を縮小させておき、術中の出血量を減らしたりする目的で行います。また



市民病院
産婦人科診療部長
出向洋人

50歳前後で過多月経がある方は、偽閉経療法により生理が再開せずに、そのまま閉経し貧血も改善する場合がありますので良い適応となります。

手術療法は、これから子供を産む予定があるかないかによって異なります。子供を産む予定のある場合は、子宮を残して筋腫の瘤だけ取る手術（筋腫核出術）になります。筋腫があるために妊娠できなかったり、流産を繰り返したりする方は手術をすると良いでしょう。ただし、瘤だけ取った場合には子宮筋腫が再び出てくることもありまます。子供を産む予定のない場合は、子宮全摘術（子宮を残さず取る手術）を行うのが一般的です。その場合、生理はなくなりませんが卵巣を残せばホルモン状態は術前と変わりません。